

止まり木



大阪市立横堤中学校

いま、旅立ちのとき

本日の卒業式で、卒業生に贈った式辞を紹介いたします。



式辞

「New one step」を合言葉に新たな一步を歩み続けた第四十三期生、九十三名の卒業生のみなさん、卒業おめでとうございます。また保護者、ご家族の皆様、本日は、お子様のご卒業、本当におめでとうございます。教職員を代表して心からお祝い申し上げます。さらに本日は、日頃より子供たちや学校を温かく見守っていただいているご来賓の皆様にもご臨席賜り、感謝申し上げます。高いところからではありますがお礼申し上げます。本当にありがとうございます。

さて、卒業生の皆さん、今、一人ひとりに卒業証書を手渡しました。皆さんは私が校長としてこの横堤中学校に赴任した時に、時同じくして入学してきました。あれから3年、私が校長として初めて3年間を共に過ごせた学年であり、感慨深い気持ちでいっぱいです。皆さんは小学校5、6年生の時にコロナの影響を受けました。そのためか入学当時の皆さんは、どこか人と距離をおこうとする、また、言いたいことを心にためてしまっているのではと心配することも正直ありました。しかし、1年2年と経つうちに担任の先生をはじめ多くの先生方と信頼関係を築いていく様子を見て、本当に安心しました。

今までの卒業生は、横堤中に後輩が先輩を目指すという「憧れの文化」を築いてくれました。

しかし、皆さんは、様々なことに取り組む中で「人を認める文化」を築いてくれました。

修学旅行では様々な体験学習に積極的に取り組み、節度ある中で存分に楽しんでいました。

宿泊ホテルの1日目の夕食時にはこの修学旅行をみんなで成功させようと「乾杯」をしたシーンが忘れられません。そのみんなの決意が2日目夜のレクレーション大会に表れていました。仲間を認め、信じることができるからこそ、腹の底から笑い、応援し、大いに盛り上がる。そんな見ているだけでも楽しめるレクレーション大会でした。フィクションなのかノンフィクションなのかどちらともとれる劇。「俺にしとけよ」の名台詞、忘れません。

体育大会では自分に与えられた役割を完璧に行うため、徹底して練習している姿に皆さんの強さを見ました。中でも昨年からはまった集団演技の「南中ソーラン」はやはり忘れることはできません。「かまえ」の凛とした声でグラウンドの空気を一変させて始まった圧巻の演技は、後輩たちへ新たな伝統をつなぐという本気さを示してくれました。

さらに、合唱コンクールでの美しいハーモニー。中学校の合唱コンクールでは、なかなか聴くことのできない四部合唱は、本当に心を揺さぶられ、感動しました。

そんなみんなを見ていて、「ああ、こんな生徒たちに体育の授業ができれば面白かったらなあ」とか「担任をすることができたら毎日が充実して、楽しいだろうなあ」とふと思うことが何度もありました。みんなはそんな気持ちにさせてくれた学年です。だから、もっともっとみんなと横中での生活を過ごしたかったなあと思います。しかし、残念ですがお別れの時です。そして旅立ちの時です。そんな巣立ちゆくみなさんに贈りたい言葉があります。それは

『人に接するときは 暖かい春の心 仕事(勉強・部活)をするときは 燃える夏の心

考えるときは 澄んだ秋の心 自分に向かうときは 厳しい冬の心』というものです。

人には優しく、暖かい心で接し、自分には厳しくなれる。そんな本当の意味で、心の強い人になってほしいと願っています。そして最後に、これからの人生、大変なことや苦しいこともたくさんあると思いますが、どうか生きて生きて生き抜いてください。これは私からみんなへの最後のお願いです。明石家さんまさんの言葉に「人生、生きてるだけで丸儲け」というのがあります。何か軽い言葉のように聞こえるかもしれませんが、「あきらめるな、生きていれば必ずいいこともある。」というメッセージに私には聞こえます。

では、卒業生の皆さん、横堤中学校はこれからも「止まり木のような学校」としてみなさんを見守っています。何かあったらいつでも力を蓄えに来てください。在校生も皆さん同様しっかり足跡を残してくれると信じています。安心していてください。最後に皆さんの輝かしい未来に希望を託し、私の式辞といたします。

令和七年三月十四日

大阪市立横堤中学校

校長 田中城明